

ぶつきょうつうしん「ごうじゅうぱく」の呪縛について」10月がつ

9月になり新作映画『八つ墓村』（清水崇監督版）のCMを目にする機会が多くありました。しかし、『八つ墓村』というと、私の場合、どうしても1977年制作（野村芳太郎監督版）のキャッチコピー「たたじや〜！」が忘れられません。その「たた（祟り）」のインパクトが強い『八つ墓村』のあらすじは、戦国時代、戦に敗れた8人の落武者が、財宝とともに山村へ逃げ延びたところから始まります。しかし村人たちは、目の前の財宝と褒賞金という「煩惱」に目がくらみ、落武者たちを惨殺するのです。死に際に、落武者の大將が「七度生まれ変わってもこの村をたたってやる」と呪詛を残し息絶えるのですが、この壮絶な演技の禍々しさは、今観ても恐怖を感じます。さて、話を戻りますが、村では呪詛の通り村の名主が発狂し、村人達を斬り殺して自らの命を絶つのです。それから村人たちは祟りを恐れて落武者を手厚く葬り、その地は「八つ墓村」と呼ばれるようになるのですが、大正時代にも村長の子孫が狂気に陥って、再び村人達を虐殺するという事件が起こるのです。これは、まるで怨霊の「祟り」によって引き起こされた猟奇殺人のように見えます。

しかし、この物語の真の恐ろしさは怨霊などではなく、己の利益や欲望のために他者を犠牲にする人間の「業」の深さに他なりません。自らがまいた悪しき種（因）が、時を経て悪果となり己に返ってくるという「因果応報」の真理が、この惨劇の本質なのです。さて、この殺人事件の謎を解き明かす名探偵が金田一耕助（映画版：渥美清、ドラマ版：古谷一行）ですが、はっきり言うと彼は連続殺人がすべて終わるまで犯人を突き止めることができない探偵です。彼（古谷一行の金田一耕助）は、事件の中で悩みながら頭をかきむしり、徐々に真実に近づいていくのですが、結局、未然に惨劇を防ぐことがほとんどできません。そんな彼は、犯罪に手を染めざるを得なかった背景や、人々の愛憎、血筋の呪縛に対して、常に「哀れみ」の眼差しを向けます。事件の真相を解き明かすことで、人々を「殺人鬼の血筋」という思い込みの恐怖から救い出すのです。

一方で現代社会を見渡すと、人間の「業」は形を変え、社会の暗部に巣くい、ニュースに溢れる「闇バイト」や「トクリュウ（匿名流動型犯罪グループ）」による事件として現れています。それは、SNSを通じて集められた若者たちが、目先の報酬に目がくらみ、罪のない人々の命や尊厳をいとも簡単に奪い去っていくのです。この様相は、400年前に財宝や報酬に目がくらんで落武者を惨殺した村人たちの姿と重なります。闇バイト組織の末端として罪悪感も感じず匿名の陰に隠れたつもりでいても、仏教の教えが示す通り、自らが行った行為の報い（因果）は自分自身で引き受けるしかないと思います。いつの時代も、真に恐ろしいのは得体の知れない祟りなどではなく、倫理観や道義を自ら踏み外し暴走していく、尽きることのない欲望なのでしょう。だからこそ、社会や自らの心に潜む業（行為・言葉・精神）に対して、金田一耕助のように頭をかきむしりながら悩み、誠実に向き合っていくことが大切なのだと思います。

